

慶應義塾大学大学院 山本教授に聞く

情報戦と放送の役割

ロシアによるウクライナ侵攻がもたらしている SNS と戦争の新しい関係、放送の役割、憲法 9 条に関する論点などについて、憲法学者として著書『AI と憲法』などでテクノロジーと憲法の関係の考察を続け、総務省「デジタル時代における放送制度の在り方に関する検討会」メンバーも務める山本龍彦・慶應義塾大学大学院 法務研究科 教授に聞いた。(構成: 渡辺 元・本誌編集長)



1976 年生まれ。慶應義塾大学グローバルリサーチインスティテュート (KGRI) 副所長。総務省「デジタル時代における放送制度の在り方に関する検討会」委員、経済産業省「データの越境移転に関する研究会」座長なども務める。主な著書に、『憲法学のゆくえ』(日本評論社、共編著)、『おそろしいビッグデータ』(朝日新聞出版)、『AI と憲法』(日本経済新聞出版) などがある。

SNS が世界に作り出した「共感の連鎖」

—— ウクライナ侵攻がもたらした情報戦について、どのように見ているか。

山本 戦争におけるプロパガンダを目的とした情報操作は昔からの手法だが、これまでと異なるのはソーシャルメディアの影響力の強さだ。ハイブリッド戦争では物理的な軍事戦略と情報戦が両輪で進み、

情報や言葉は「兵器」となっている。従来の情報戦や情報操作とは違う段階に来ている。

—— イラク戦争(2003年～)では、ミサイル発射など米国側からの映像が世界にインパクトを与え、放送は戦争の実態を伝える役割を担っていた。ウクライナ侵攻では、SNS が圧倒的な量で戦争の実態を伝えている。

山本 そのポジティブな側面は、ロシアによる侵攻を批判する「共感の連鎖」を世界的に作り出したことだ。実際にウクライナにいる人たちが戦争の現場を SNS に投稿していくことで、市民の窮状や声が世界にリアルに伝わっている。ロシア人の中にもそれに共感する人が出てきて、グローバルな共感の連鎖が広がっている。このことを、私は「共感の防衛網」という言い方をしている。共感の防衛網が世界的に張り巡らされたことは、SNS によるところが大きい。

他方で、この共感の防衛網は非常に強い防衛力を発揮すると同時に、世界を感情的・情緒的な空間にしていくという側面もある。ロシアに対する防衛を超え、ロシアや同国に協力する国家の一般市民に対するヘイトなどに転化してしまうリスクがある。

もう一つのネガティブな側面はフェイクニュースの拡散だ。兵器化した SNS の情報には、信頼できる事実なのか、フェイクなのかの見分けがつきにくいという問題もある。

放送の役割の重要性が増している

—— 戦争報道における放送のポジションが大きく変わっているのではないかと。SNS と放送の関係はどう考えているのか。

山本 SNS との新しい関係によって放送を位置づけていく必要がある。放送は取材をベースにしており、放送の報道内容は基本的に事実であるということが前提になっている。放送に先回りして SNS でいろいろな情報が飛び交い、どの情報を信じればいいのかわからないという中で、放送には SNS で発信された情報の“答え合わせ”をするとい